

Policy Exchange 2008/05/11

## 江戸期大阪の都市ビジネス： なぜ大坂は『天下の台所』になったのか<sup>1</sup>

大阪市立大学大学院経営学研究科

稲葉祐之

**要旨** 本稿では江戸時代、日本の数ある商業都市の中でも「天下の台所」と謳われ繁栄を極めた大坂がなぜそのような地位につくことができたのかを、都市戦略の観点から考察する。<sup>2</sup> われわれの結論は、当時の大坂はその内部に数々の商業上のイノベーションを創発させることで、（１）都市の発展にとっての戦略的資源である商人たちを集積させ、（２）全国市場の建値機能など他の商業都市にはない優位性を得ることに成功し、（３）それらがさらなる商業集積や新規ビジネスの創発を促す、という都市ビジネス高度化のスパイラルが生じたことにある、という点である。

### 1. はじめに

都市の経済的な成長・発展に本質的にかかわるのが、都市に内在する産業はいかに高度化していくのかという都市ビジネスの高度化についての問題である。本稿では、大阪市立大学大学院経営学研究科・重点研究プロジェクトの一環として桃山時代後期から江戸時代中期までの大坂の商業の発展を、その内部でおこったイノベーションとの関わりの中で論じてゆく。本稿は既存の豊富な文献から得られる内容を、都市ビジネスの高度化という観点から再構成したものである。とりわけ都市ビジネス—本稿では大坂の商業—の発展を、都市内でおこったイノベーションとの関わりに注目して論じ、都市ビジネス高度化に関するインプリケーションの提示をめざす。

#### 1. 1 なぜ大坂なのか

まず本稿で大坂を取り上げる理由について。「大阪モデルの開発」というテーマのもとにはじまった本プロジェクトの一環として作成された本稿は、現在あるいは過去の大坂を取り扱うことが必要条件であった。これが本稿で大坂をあつかう第一の理由である。

一方で本稿で大坂をあつかう積極的な理由は、大坂という都市の出自に由来している。後述するように当時の大坂は（地の利や豊臣・徳川という日本の支配者の庇護といった優位性があったとはいえ）、畿内の商業都市としては後背人口が決して多いとはいえない新興都市であった。なぜそのような新興都市が京都、堺、平野、兵庫、尼崎など既存の商業都市・港湾都市を追い抜き、江戸期を通じて日本の建値市場を担い経済の中心となった「天下の台所」としての地位を確保できたのだろうか。これは、都市ビジネスの高度化というテーマに示唆を与えうる興味深い事例である。

また別の理由として、同時期に同様の状況で生まれた江戸と同じく全国統一市場の出現を視野に入れ政権所在地としての発展を運命づけられた大坂は、その都市戦略が初期段階から当時の支配者たちによって非常に明確にデザインされていたとすることができる。この点は、当時の大坂・江戸が京都など旧来の主要都市とは違う大きな特徴であり、都市ビジネスの高度化というテーマをあつかう場合にも、目的志向でデザインされ発展していく都市ではそこでおこっていることが非常につかみやすいのである。

さらにもうひとつ積極的な理由として、江戸期の都市についてあつかう意義を上げることができる。それは江戸期の幕藩体制は、現代のグローバル経済といくつかの類似点を持っていることである。第3節で詳述するように、幕府の統治という基本枠組みのもと各藩はそれぞれ独自の経済政策（新田開発や特産品開発などの産業政策、商人からの融資や藩札の発行・徴税など財政・金融政策）を展開し、全国をカバーする市場が形成され、米・金貨・銀貨を基軸とする経済であり、通常の見物取引の他に信用取引・先物取引が各種の市場で活発に行われていた。当時の江戸や大坂の立場は、市場経済という基本枠組みと複数の基軸通貨を共通項とするグローバル経済と各国それぞれの経済政策の影響下で生きている東京やニューヨークのポジションに類似しているのである。もちろんそれをもって江戸期大坂の分析が、現代大阪におけるグローバル競争下の都市ビジネス高度化の問題に直結する、というつもりは毛頭ない。ただある程度類似したモデルを考えることで、そこから現代社会の分析にも意味のある何らかのインプリケーションを得ることは可能かもしれない。

以上が本稿で桃山から江戸期にかけての大坂を取り上げる理由である。

## 1. 2 本稿の構成

本稿では、まず第2節および第3節で大坂と江戸の初期の開発状況を概観する。ここでは、豊臣秀吉と徳川家康という当時の日本の支配者の統治構想に沿う形で大坂と江戸が開発されていったことが示され、新たに出現した日本の統一市場を舞台にこれらの都

市が経済面で重要な地位を占めることが示される。次に江戸時代の経済システムで本稿にかかわる部分をごく手短かに概観する。特に平和な時代になり、統一された市場で活躍する商人の経済的優位性が強調され、彼らの集積が商業という都市ビジネスの高度化を考える際に重要な意味合いを持つことを理解するための基礎が示される。

第5節では、大坂が「天下の台所」として繁栄した理由について検討を加える。既存の文献が指摘してきた論点にも検討を加えつつ、都市ビジネスの高度化とイノベーションという観点から分析する必要性を提示する。第6節では、大坂に商業の高度化をもたらしたイノベーションについて考察する。問屋の発生、差益商人化、各種投資法の開発といったイノベーションを中心に、建値市場の掌握や全国の流通支配、大名貸しや地方産業への投資による各藩への経済支配などについてふれる。第7節では、大坂の事例がもつ現代へのインプリケーションについて考察し、結論へと至る。

## 2. 大坂の登場

現在の大阪府に含まれる摂津・河内・和泉にはじめて大都市が形成されるきっかけとなったのは、豊臣秀吉による大坂城築城と大坂市街の開発である。それ以前とりわけ応仁の乱以降織豊政権成立までの摂津・河内・和泉地域は、経済的には首都（すなわち京都）経済圏に組み込まれていたが、政治・軍事的にはさまざまな勢力が分立割拠する不安定な地域—これは戦国時代当時の他地域でも多くみられたことだが—であった。<sup>3</sup> そしてこの時代の摂河泉地域には、交通・商業機能の卓越した多核的集落としての性格を持つ都市（街道沿いの都市、寺社門前、港津等を含む）や、戦国期の領主たちによって建設された城下町などが散在していた（仁木，2003）。しかし16世紀後半に日本が統一に向かうにつれて、大都市としての大坂が登場する素地が作られてゆく。

本能寺の変でたおれた織田信長の後継者となった豊臣秀吉が、大坂城築城を開始したのは1581年のことである。場所はかつての畿内一向一揆の中心であり、当時廃墟となっていた大坂本願寺寺内町。淀川の水運と京への街道があると同時に、瀬戸内交通の起点に位置し堺や兵庫といった貿易都市にも近い要衝であった。

大坂城本丸が完成した1585年に豊臣秀吉は関白に就任、天下人として大坂から全国の大名に惣無事令（大名間の私闘を禁じる法令）を発令し、大坂は政権所在地として事実上の首都となった。この時代、御所のある京都には関白の居館として聚楽第を築き、また諸大名やその妻子にも在京を命じたり、あるいは聚楽第破却前後は京都・大坂間の水陸交通の要衝で京都に近接した軍事・経済拠点である伏見に桃山城を築城するなど、

豊臣政権における首都機能は京都と大阪の二元構成（今井・村田，2006）、あるいは大坂・京都・伏見の三元構成（仁木，2001）となっていたことに注目する必要がある。しかし、統一された日本の政治・経済の中心地としての地位を見据えた上であらたに形成された都市という大坂の本質は、強調されるべきである。

この間も大坂の開発は進む。豊臣政権期の城下町は上町（うえまち）台地に南北方向に形成されていた。大坂城三の丸から上町台地南端の四天王寺まで、やや南西方向に傾斜した上町筋、谷町筋にそって北平野町、南平野町が作られ、自治都市として栄えていた平野郷から町人を移住させた。また三の丸の西側には東横堀川までの間に上町があり、ここに中心的な町屋が形成されたのである（今井・村田，2006）。

この過程で、城下には諸大名の屋敷が設けられた。また築城に動員されたため諸大名は多くの物資と人員を大坂に送り込むことになったが、同時に領内の物産を大坂でより高値で販売するために蔵屋敷を設け、年貢米や領内の産物を輸送したのである。これが海上交通・河川交通・街道交通の利にめぐまれていた大坂が大都市として発展するきっかけとなってゆく。さらに1598年からは、大阪の発展で重要な船場（せんば）の建設がはじまった。こうしてわずか十数年で近世都市大坂の原型が成立したのである。

1615年の大阪夏の陣で豊臣氏は滅亡し、大坂城と城下町の大部分も破壊されたが、すぐに徳川幕府による復興が始まる。まず市街地が復興された。東天満、船場、西船場の市街地を整備して避難していた町人を再び定着させ、新たに市街地を拡張して破却された桃山城の城下町住人をそっくり移住させる。また1619年以降新たな運河（道頓堀、江戸堀、京町堀）が幕府の認可のもと、豪商たちの投資によって開削された。またその周辺部分が広大な宅地として開発され、開発を請けおった豪商から多くの町人たちに売却されている。

ついで近畿・西国の大名を動員し、大坂城再建の天下普請がおこなわれた。この大規模工事に必要とされる膨大な建築資材と人員が畿内・西国から大阪に向けて流入したことになる。<sup>4</sup> 大坂の都市機能は急速に回復し、また大坂への物流体制が再確立され、そしてさらに拡大された。ここに「天下の台所」としての大都市大坂の基盤整備が完成した。かくして新たに生まれた日本の統一市場のなか、大規模な輸送網と蔵屋敷などの物流機能をもち、幕府の経済支配システムに組み入れられた形で都市大坂は成立したのである。

### 3. 江戸の登場

本節では、江戸時代の政治・経済で大坂と切っても切れない関係にあった江戸の開発について概観する。大都市としての江戸の登場は、大坂とほぼ同時期である。それ以前、15世紀の半ばには太田道灌が江戸に入り、江戸城を築いた。太田道灌は関東管領上杉氏の一族扇谷上杉家の有力武将（そして家老）であり、江戸城を中心に南関東一円で活躍する。この時代、現在の神田川ならびに日本橋川の前身である平川（平河）が、隅田川に流れ込む辺りに城下町が形成され、江戸は関東の水運・陸運の中心地として発展を始めた。

道灌の死後扇谷上杉氏の衰亡によって、江戸城は後北条氏の支城となっていたが、1590年その後北条氏が豊臣氏によって滅亡する。その旧領に封ぜられたのが徳川家康で、関東地方の中心となるべき居城を江戸に定めた。大都市としての江戸の歴史はここから始まるのである。

徳川家康の入府以来、江戸の開発は3期およそ70年にわたる。

- ・第一期 徳川家康の江戸入府から幕府開設まで（1590-1603年）
- ・第二期 幕府開設から豊臣家滅亡まで（1603-1615年）
- ・第三期 幕藩体制の確立期（1615-1660年）

城下町の割付に必要な土地を埋め立て、江戸建設に必要な物資輸送を確保するために必要な運河の開削や港湾施設の建設、上水の確保などが第一期におこなわれた。つづく第二期、第三期は天下人となった徳川家康とその後継者たちが諸国の大名に工事を命じる天下普請の形で進められる。この間に江戸城築城、外堀開削、神田川の整備などが行われ、江戸城と江戸市街地が完成した。

江戸の経済的な繁栄も始まる。江戸は政権所在地として政治の中心地であるとともに、消費の中心でもあった。たとえば江戸在府制度により、江戸初期の諸大名の江戸在府にかかわる費用は全国の米の生産高の35から42%に相当したという（鈴木、2002）。つまりそれだけの富が江戸に集中し、消費がうみだされていたのである。そのため江戸では商工業が大きく発達することになった。これは天下普請のための資材や人員の調達、普請にかかわる人々の日常的消費にかかわる大需要が恒常的に発生したことや、大名の江戸在府制度によって全国から江戸に集まる単身武士の消費が活発になったためであった。

江戸はこの間、その物流機能を高めてゆく。家康の江戸入りとともに始まった江戸一行徳間の小名木川沿海運河の開削は、既存の関東地方の河川運輸網と完成しつつあった全国の海上輸送網を直結するものであった。また日光東照宮造営時に利根川の川普請が天下普請として行われ、江戸と日光が水路で直結されその周囲の水運網とも結ばれて関東地方全体の河川輸送網の整備が急速に進んだ。そして利根川の瀬替え（東京湾に流入していた利根川を鬼怒川支流の常陸川に分流して銚子に流入させた工事）により、東

北地方からの船が銚子から運河網を通過して直接江戸入りすることを可能にし、東北から江戸への時間的正確度の高い物資輸送が可能になった。<sup>5</sup>

16世紀末に建設がはじまってわずか30年、大都市大坂と江戸はこうして出現したのである。

#### 4. 江戸時代の経済システム

さて江戸期大坂の都市ビジネスの高度化について考える前に、その理解の前提となる江戸時代の経済システムについて鈴木（2002）をもとに概観しておこう。

##### 4. 1 幕藩体制下の消費システムと経済発展

大名の統制システムである幕藩体制は、諸大名の強大化を抑制するためにさまざまな消費手段を内包させていた。幕府が諸大名に命じる天下普請は、全国の名の資材や労働力を江戸・大阪・長崎などの幕府直轄地や街道整備などに投下させることになった。参勤交代や江戸在府制度による江戸と国元での生活も同様である。これらの消費はたえず有効需要を発生させて江戸時代の経済発展の呼び水となり、また大都市での貨幣需要を増大させていた。

##### 4. 2 封建体制下の多様な地域経済

一方各藩は幕府の統制をうけつつも、さまざまな経済政策を実行していた。新田開発・商品作物の栽培・特産品の開発・商工業の育成といった産業政策、投資、徴税、商人からの資金借入れや藩札の発行といった財政・金融政策などが、藩レベルで行われていた。そしてそれらは、統一された全国市場ともつながっていたのである。

##### 4. 3 米本位制度と貨幣経済の混在

幕藩体制下での武士階級の主要収入は領地からの年貢米であり、また旗本・御家人への幕府からの給与も蔵米（現米）で支払われるという米本位経済であった。経済活動が盛んになり貨幣経済が進展すると、その時々需給に応じて米と貨幣の取引をおこなう米相場が形成された。これらの米による収入は大坂堂島の米市場や蔵前の札差<sup>6</sup>などを通じて貨幣に換金された。それらの貨幣は武家の支出に回された。つまり、米本位制度と貨幣経済が混在する仕組みになっていたのである。そして米相場をたてて米の売買・金

融をおこなう米商人・札差は、貨幣経済の進展につれて大きなビジネスになっていった。

なお貨幣経済は、都市部だけでなく農村にも浸透していった。これは寛文期以降の余剰生産物の増加や、大消費地に向けての商品作物の生産・流通のため貨幣が使用されることになったためである。さらに天下普請によるインフラ整備が一段落した寛文期（1660年代頃）から宝永期（1710年代頃）の時期に、年貢が七公三民から四公六民あるいは三公七民へと引き下げが進められ、庶民の購買力が向上したという理由もある。これらの商品作物も大都市での消費にまわることになり、大坂・江戸へと流通することになった。当時の商品流通の概要は、図1のように示すことができる。

#### 4. 4 武士階級の経済的困窮

さてあいつぐ天下普請や参勤交代、江戸在府制度にかかわる費用を捻出するため、あるいは収入の増加をねらって、諸大名は新田開発や農地の生産力向上を積極的におこなった。<sup>7</sup> しかし新田開発などによって米の増産がはかれるほど米の供給が増えて米価は下落し、結果的に米に対する他の商品の価格が上昇するという「米価安（べいかやす）の諸式高（しよしきだか）」がとりわけ元禄期以降に進むことになった。同時に進行していた貨幣経済の浸透は米価と諸物価の連動を断ち切り、米の増産が貨幣収入の増加に結びつかない状況になっていた。また耕作可能な新田はおおむね開発しつくされ、農業生産の伸びも鈍化してきた。そのため米本位制度に立脚して定量の米という形で収入を得ていた武家階級には、実質的な収入が減少し経済的に困窮するという現象が徐々に進行することになった。

#### 4. 5 三貨制度

貨幣経済の浸透が徐々に進んだこの時代、国内では基本的に金貨・銀貨・銅貨という3種類の通貨が流通していた。つまり金・銀・銭の三貨制度である。独特だったのは、例外はあるもののおおむね地域ごとに本位貨幣が異なっていた点である。つまり金が江戸を中心とする東国―すなわち陸中から関東、尾張までの範囲―の本位貨幣であり、銀は上方を中心とした西日本―陸奥から日本海側の羽後、越前と関西以西の全域―の本位貨幣であった（「東の金遣い、西の銀遣い」。なお補助貨幣である銭は全国的に流通していた）。しかも金は定額貨幣、銀は秤量（しょうりょう）貨幣という違いがあったのである。<sup>8</sup>

江戸と上方での商品売買はそれぞれ金と銀が決済に用いられ、たとえば江戸で金を得た上方商人は上方の両替商に手数料を支払って銀と交換し、商品の仕入れをおこなった。幕府は金・銀・銭の交換比率を公定していたが、実際には交換レートは金銀相場の中で

変動していた。外国為替市場の変動相場制のようなものである。これらの為替相場をたてて両替・金融をおこなう両替商は、貨幣経済の進展につれて大きなビジネスになっていった。また、金貨・銀貨の輸送の手間を省くために考案された為替切手のような有価証券が流通するようになった。

#### 4. 7 平和の元での商人の繁栄

幕府によって恒常的な支出を迫られた大名や、あるいは構造的な米価安による経済的な困窮が進行した武家階級全般とは対照的に、平和な時代と貨幣経済の進展で経済的な繁栄を誇ったのが商人たちである。都市機能の集積や都市の発展を左右する富の蓄積の担い手は商人たちであった。それゆえ平和のもと統一された全国市場のなかで活躍していた商人をいかに集積させるかということは、都市の成長・発展のうえで戦略的な重要性を持っていたのである。

### 5. 「大坂の優位性論」再検討

16世紀後半に開発がはじまって以来大坂の人口は、江戸時代初期の再建を経ておおむね30万人から40万人台の間で推移した。江戸（約100万人）、京都（約40万人）につぐ都市規模に成長したことになる。しかし当時の大坂の強みは、なんとといっても「天下の台所」と呼ばれたその経済機能にあった。

江戸と大坂、ともに16世紀後半に開発がはじまった後発都市である。なぜこれらが従来栄えていた都市を追い越して繁栄を謳歌できたのか、既存文献をレビューしつつ考えてみよう。

#### 5. 1 地理的優位性

京都や織田信長が本拠を置いた安土が街道と淀川・琵琶湖の水運の利用という優位性を活かしていたのに対して、豊臣氏による大坂開発は街道交通と淀川・琵琶湖の河川交通、そして瀬戸内海をはじめとする海上交通とを結びつけるものであった。これは、新興都市大坂が既存の商業都市に十分以上に対抗できる地理的優位性をもたらすことになった。ただし、地理的な優位性のみで当時の大阪の強みを説明することはできない。なんとといっても大阪は当時の新興都市であり、その周辺には京都・伏見・堺・平野・兵庫など旧来からの多くの商業都市があった。そのような商業都市間の競争から抜きん出るうえで重要な要因は、他にも存在したのである。

## 5. 2 政権とのつながり：インフラ投資と物資の集積基地

大坂と江戸の開発が本格化したのは、豊臣・徳川両政権による日本統一が完成した時期と重なる。経済的にみるなら、全国の統一市場が生まれる直前という時期にあったということは注目すべきである。つまり大坂と江戸は豊臣・徳川両政権の全国支配のお膝元として開発される運命にあった。大坂は豊臣政権の実質的な首都として、また江戸時代には強力な経済機能を持つ商業都市として機能した。そして江戸は、徳川幕府のお膝元として 50 万人にのぼる在府武家階級の消費をまかなう都市として発展することができたのである。なお権力とのつながりとの関連でいえば、大坂はときの権力者たちがその都市機能を充実させるために、堺・平野・伏見などの町人を城下に強制移住させるなどの措置が執られている。

政権とのつながりはそれだけにとどまらない。江戸時代の大坂・江戸は他の幕府直轄地（京都・伏見・堺・博多・大津・奈良・長崎・佐渡の金山など）とともに、全国の統一された市場・経済を運営するための幕府の経済政策の中に組み込まれた。大坂はもはや畿内の有力都市というだけでなく、日本全体の経済運営に関わりを持つようになったのである。

さて豊臣・徳川政権とのつながりの中で、大坂は江戸と同様に大規模なインフラ投資を得ることとなった。先述した天下普請による大坂城築城と大阪市街地の形成、そして水路の建設である。また天下普請を命じられた諸大名は船と蔵屋敷を建設し、領国から大量の人員・物資を大阪に搬入したことで物資の集積基地としての機能が充実した。ただし天下普請のような大規模インフラ投資は短期的な景気刺激策として機能するが、長期的な都市の繁栄を保証するとは限らない。すなわち大阪の町方人口は、大坂城天下普請の終了直後で大阪市街地開発が続いていた 1634 年には 40 万 4929 人であったが、そのようなインフラ投資が収まり全国的にも経済的な停滞が続いていた 1665 年ごろの人口は 26 万 8760 人と、1634 年比でおよそ 35%という大幅な減少を示している（今井・村田，2006）。現代の都市開発でも大規模な開発やオリンピックなどの巨大イベントの開催後によく見られることが、当時の大坂にも当てはまっていたのである。単なるインフラ投資による景気刺激策に頼らない内発的な成長がなければ、大坂はせいぜい人口 20 万人台の、単なる物資の集積基地で終わっていたかもしれない。

しかし歴史が示すように、以後大坂は単なる物資の集積基地ではなく「天下の台所」として大いに繁栄する。減少した人口も回復し、寛文期の 26 万人台から百年後の 1765 年には最多の 41 万 9863 人に増加、以後 20 年近く 40 万人台を維持し江戸時代を通じておおむね 30 万人代後半で推移するようになるのである（脇本，2006）。ではなぜ、こ

のような発展が可能になったのだろうか。

### 5. 3 江戸への物資供給

大坂は大消費都市江戸への物資供給によって、単なる近畿の有力都市あるいは物資の集積基地から「天下の台所」へと発展してゆくきっかけをつかむことになる。その発展の契機となったのは、海上航路の開拓であった。大坂・江戸の天下普請の前後に、各大名は年貢米の回漕や物資・人員の輸送に自前（あるいは他藩の）船団を用いて輸送をおこなっていた。このときに用いられた航路がのちに民間の定期航路へと発展するのである。

まず 1620 年代に大坂・北浜の商人たち（江戸大廻し問屋仲間；のちの大坂廻船問屋仲間）によって大坂・江戸間の回漕業がはじまった。この江戸大廻し問屋は江戸廻米の開始とともに栄えて、菱垣廻船による大坂－江戸航路が成立することになる。つまり、上方と江戸を結ぶ大量輸送路が確立したのである。当時の主要運輸物資は、米・木綿・油・綿・酒・酢・醤油などであった。ただしこの時点では江戸・関八州からの注文をうけて、上方でつくられる主要製品の回漕がおこなわれていたもので、大坂は上方・西国と江戸との物流を担っていたにすぎなかった（もちろん上方の江戸への物流拠点として、兵庫・京都・伏見・堺などのライバルにまさる力を蓄えてはいたが。）。

さらに以前から成立していた東廻り航路・西廻り航路が、1680 年代に江戸商人河村瑞賢によって改良された。また、その直後には大坂・江戸間の新たな民間定期廻船すなわち樽廻船も成立している。この西廻り航路の確立は、大坂の発展にとって非常に大きな意味を持った。すなわち西廻り航路の確立によって、従来の西国・九州・瀬戸内海・中国・四国方面との交通路に加えて、新たに蝦夷地・東北・北陸・山陰との輸送路も確立したのである。

日本統一市場の物流網の中核への参入を果たした大坂の興隆とは対照的に、畿内の旧来からの商業都市すなわち京都・伏見・堺・兵庫などは、その地位が相対的に低下していった。以降これらの都市は、むしろ織物（西陣）や清酒（伏見）、焼物（清水）、刃物（堺）などのような手工業を主体とした都市へと性格を変えてゆくことになるのである。

9

### 5. 4 江戸 v s 大坂？：「天下の台所」をめぐる

同時にこの東回り航路・西回り航路確立によって、日本全国を網羅する水上輸送網が確立されたことになるのだが、それは別の問題に大坂が直面したことを意味していた。従来の上方・西国の物産を江戸に回送する航路を主催する立場から、全国の輸送網の主

導権を巡って直接江戸と競合することになったのである。

当時の江戸は、交通の要衝そして物流拠点としても優位な立場に立っていた。参勤交代のための江戸を中心とした街道整備が進むと同時に、水上運送網の利用という点でも大坂に決してひけをとらなかつたのである。

たとえば先述した江戸建設第一期に既存の江戸湊をわざわざ埋め立てたのは、単に市街地建設のための平地が不足していたという理由だけでなく、あらたにより大規模な運河・水路を開削しあるいは港湾施設を建設して全国からの物資・人員を受け入れるだけのインフラを構築するためであった。それだけではない。これらの運河・水路が、江戸の後背地に控える利根川流域の水運網と接続され一体化された。さらに 1630 年代には利根川を鬼怒川支流の常陸川に分流させることで利根川と鬼怒川を一体化させて関東一円の水運網をほぼ完成させ、関東の河川水運網と日本一円の海上輸送網が江戸で結びつけられていたのである。<sup>10</sup>

こうしてみると大都市としての歴史はわずかに大阪の方が長い、江戸も大阪に劣らず水上交通・物流インフラが非常によく整備されていた。また江戸自体が大消費地であることもあって、大坂ではなくむしろ江戸が「天下の台所」になる可能性も高かつたわけである。実際に現代の東京は政権所在地であり日本最大の都市であって、かつ生鮮食料品市場から金融市場に至るまで商業集積の面でも日本の中心となっている。なぜ当時の江戸は、そうならなかつたのだろうか。そしてなぜ大坂が「天下の台所」としての地位を得ることができたのだろうか。

本稿の仮定は、当時の大坂が江戸に勝る商業・流通機能の優位性を有していたというものである。そして結論を先にいうのであれば、その優位性は非常に高度な商業・物流機能を発達させたために獲得されたものであると考えることができる。大坂を「天下の台所」たらしめたファクターは何か？ 高度な都市ビジネスの集積によって大阪史上もっとも繁栄を誇つたと考えられる江戸時代の「大坂モデル」を考えてみよう。

## 5. 5 「畿内の優位性」論

大坂と江戸、可能性としてはどちらも「天下の台所」となることが可能であった。しかし実際に大坂が「天下の台所」となることができたのはなぜか？ もっとも代表的な説明は畿内の経済的な発展と資本の蓄積を理由に挙げる、というものである。たとえば、武光（2003）は以下のように説明する。

「では、なぜ江戸ではなく、大坂が流通の中心地になつたのだろうか。それは江戸時代はじめの関東地方が、経済的に立ちおくれたことに帰因する。

関東の農業は、畿内地方（大阪府、奈良県と京都府、兵庫県の一部）にくらべていちじるしく発達が遅れていた。米が十分にとれないうえに、衣料に用いる綿や、灯りをとるための油をつくる菜種も不足していた。上方とよばれる京都、大阪からみれば、江戸は辺地にすぎなかったのである。

江戸幕府は多くの武士を城下町に集めてみたが、かれらが必要とする食料や衣料などの物資を、江戸だけではまかなうことはできなかった。そのため、必要物資のかなりの部分は、他の土地からもってこなければならなかった。

これに対して、上方には食料が十分あり、商人の手によってたくわえられた資本も豊富であった。そのため、幕府が大坂を商業都市として発達させていこうとする方針を打ち出すと、上方の商人がつぎつぎに大坂に集まってきた。こうして、幕府の予想をはるかに超える大都市、大坂がつくられたのである。」（武光，2003，13-4頁。）

しかし上述のような説明だけでは、我々がめざす大坂モデルを説明するにはまだ不十分な点がある。まず大坂の他都市との比較優位について。たしかに大坂は幕府の直轄領、物流基地そして幕府の西国支配の軍事拠点として保護を受けた。しかし畿内でいえば、京都・堺・伏見・奈良・大津なども多かれ少なかれ幕府直轄領として地子銀（じしぎん；農民の年貢米に相当する直接税）の免除といった保護や天下普請の恩恵を受けていたのである。江戸も大坂とほぼ同時期にそして同様に、町地の町人に対する地子が免除されていた。また大坂は上方の高付加価値商品（酒・綿・衣料・工芸品・商品作物など）の生産地に近かったことは確かに優位性のひとつとなるが、江戸へ回漕可能な港を持つ畿内の商業都市にとってもその事情は同じである。

以上の点を考えると大坂に商人が集まり「天下の台所」が生まれた背景は、幕府の保護や物流拠点としての優位性、上方に位置するという地理的優位性があったからというだけでは、十分に説明がつかない。むしろそれ以外にも理由があるのではないだろうか。われわれは、大坂の町人たちがいくつかの商業上のイノベーションを起こしたことによって、大坂を日本の統一市場の中核として発展させることができたと考えている。この視点から考えてみよう。

## 6. イノベーションと都市ビジネスの高度化

江戸期大坂の商業の繁栄とその高度化のプロセスを説明するうえで本稿のとり立場は、都市内での複数のイノベーションの連鎖が生じ、それがスパイラル的な都市ビジネスの

高度化をもたらされた、というものである。以下でその高度化プロセスをみてゆくことにしよう。

#### 6. 1 江戸期大坂のイノベーション1：問屋

近世海運そして物流の中心として、「天下の貨、七分は浪華（なにわ）にあり、浪華の貨、七分は船中にあり」（広瀬旭荘『九桂草堂随筆』）とまでうたわれた大坂。豊臣・徳川両政権のもとでの都市開発で、大坂はその物流拠点としての能力を身につけてきたことはすでに述べた。しかし物流インフラ網の充実や大消費地への近接性ということなどを考えれば、現在の東京のように当時の江戸が「天下の台所」の地位を兼ね備えていてもおかしくはない。

大坂が日本の統一市場の中核となることができた理由のひとつは、新しい時代のビジネスの基盤となったイノベーションが大坂でおこっていたためであった。つまり商品流通過程において、問屋という業種を生み出して集積させ、それによって建値市場を担えるだけの商人たちそして商品の集積を進めることができたのである。

たとえば武光（2003）はこの時代に全国規模の流通が盛んになった理由を、資本力を持つ近世の問屋（とんや）が多く誕生したためとしている。「江戸時代はじめに大坂に問屋が生まれたことが、日本の商業が急速に発展するひとつの要因となった」（武光，2003，39頁.）のだ。

そもそも問屋の前身は、鎌倉時代以降中世を通じて活動した問丸（といまる；あるいは問（とい））である。彼らは遠隔地を結ぶ商業取引の発生とともに生まれ、各地の湊や大河川沿いの交通の要地で手数料を取って商品の中継ぎや委託販売、運送に従事した（石井ほか，1997）。室町時代には問屋（といや）と呼ばれるようになり、やがて運送専門や卸売専門に業種分化して各々が問屋と呼ばれた。

のちに全国の流通を手がけることになる近世の問屋（とんや）は、大坂で誕生していた。武光（2003）によれば、文献に残る近世最初の問屋は1616年大坂の油問屋加島屋三郎右衛門である。その後昭和にはいってチェーンストア・オペレーションが生まれ、メーカーと小売の直取引が増加するようになるまでの間、問屋は350年以上にわたり日本の流通を支配することになったのは周知の通りである。

さて新しく登場した問屋はみずから蓄積した資本で自家の蔵を持ち、大量の商品を仕入れる。そしてそれを細分化して多数の小売におろせば大きな利益を得ることができた。油問屋にはじまり、元和年間（1615-1623）には大坂で炭問屋・米問屋などが生まれている。大名から大量の米を買い付ける米問屋などは大規模資本を必要とするが、さらに寛永年間（1624-1643）になると木材問屋、木綿問屋、生魚問屋、青物問屋、干鰯問屋

など中規模の資本力でも営むことのできる、より細分化された問屋が生まれている。こうして1640年頃までの25年ほどのうちに、大坂では問屋による流通の支配が確立した。このころまでに問屋の利益を守る会屋（同業者組合）も大坂で誕生している。

江戸での問屋の成立は大坂より遅く、そのはじまりは1624年にあらわれた木綿問屋であるという（武光，2003）。江戸にも問屋が生まれ、大坂と江戸を結ぶ航路が開拓されると江戸と大坂の商品流通を手がける問屋が現れるようになった。積荷問屋・廻船問屋・荷受問屋である。武光（2003）によれば、元和年間の末までに大坂の問屋の数は70～80軒に達していたという。

問屋は上方・江戸間の流通のみに従事していたわけではない。航路の開発が進むにつれて大坂の仕入問屋が商品の買い付けに全国に進出していった。また有力な商人は地方の有力大名と結びついて、その藩の商品を一手に引き受ける国（くに）問屋も台頭してきた。仕入問屋・国問屋の登場で、以前にも増して多くの物産が、とりわけ大坂に運び込まれるようになってゆく。大坂の問屋の活躍で、米のみならず多種多量の商品が大坂にもたらされるようになったわけであり、また逆に菜種油・鉄道具・塗り物などの大坂の産品が全国の城下町へと広まっていった。

しかし1640年代をすぎて大坂がこれらの問屋がもちこんだ大量の商品があふれるようになると、商人間の競争が激しくなり、買い手はより質のよい物を求めるようになってゆく。手広く商品をあつかう問屋よりも専門化してより商品知識をもった問屋が競争力を持つようになり、それに従って国問屋の専門化が進んでいった。ちなみに1679年の大阪の問屋について記述した『懐中難波雀』には、54種にわたる多様な業種の問屋が733軒あったとされる（武光，2003）。

これらの問屋の発展は、**図2**のようにまとめることができる。問屋の出現によって、安土桃山時代までの流通網と比較してはるかに大規模・長距離の流通がはじまったのである。そして大坂は、問屋という流通の根幹を押さえる仕組みを生み出し、わずか80年足らずの間にそれらの問屋を大量に集積させることができた。問屋が集積する大坂には、必然的に多くの商品が集まってくることになる。他の都市（とりわけ江戸）に先駆けて問屋の集積に成功し、その結果さらに多くの商品を大坂に惹きつけることに成功したこと、これが本稿で大坂が「天下の台所」となったと考えられる第一の理由である。さらに問屋が大坂に集積するにつれて、相乗的に京都・堺などの周辺の商業都市の商人が大坂に店を出す、あるいは移転してくるようになり、大坂の商業集積はますます進んでいくことになったのである。

なぜ大坂で問屋が発達したのだろうか。大坂はその成立初期にたびたびおこなわれた天下普請などのために、早い時期から遠隔地物流がおこったことがまずあげられるのだら

う。さらに当時はまだ新興都市だったために後背市場に十分な消費者がおらず、小売業が発達しにくかったことも関連しているのかもしれない。とくに、同じ新興都市でも多くの武家人口を抱えていた江戸や、古くから天皇家・宮家・公家・寺社などの消費者人口を多くもつ京都などと比較しても消費者となる後背人口が少なく、小売ベースの商業集積規模が小さかったことも可能性として考えられるだろう。

このような全国の流通を押さえる問屋を生み出し、しかもそれを多く集積させた大坂は、そもそもの物流拠点としての機能に加えて新たな機能を獲得した。「諸式（しよしき）相場の元方」とまでいわれ、全国の物価に影響を与える建値市場としての機能である。鈴木（2002）は大阪の根本的な強みのひとつとして、建値市場の機能を以下のように論じている。少し長いが引用しよう。

「大消費都市江戸への物資供給によって成長したのが、「天下の台所」大坂だった。このような呼び方が当時一般的だったのは、日本全国あるいは海外の物資が大坂商人によって手広く集荷され、相場が建てられ、江戸に送られていたからであった。一方で江戸の消費動向をつかみ、他方では諸国物産の産出高・産地形成などを頭に置きながら、大坂商人は全国の物資の価格決定をするという、物資流通ルートの急所を押さえていた。

この機能を具体的に想像するには、現在の東京の中央卸売市場を思い浮かべればよい。海外も含め全国で生産される青果物は東京の中央卸売市場（平成元年までは神田市場、現在は大田市場）に集荷され、そこで値付けされる。その理由は、東京という大消費地で付けられた値段が全国の青果市場での価格形成を左右するためである。はしり物や新種は、必ずというほど東京の中央卸売市場に出荷され、そこで値段を付けられる。これは、小さな地方市場では、どんなに珍しい果物でもそれを評価して値付けをする能力が乏しいからにはかならない。これが東京の中央卸売市場のプライスリーダーとしての機能である。

江戸時代には大坂に物資が集まったが、単に物資を集積させること以上に建値市場としての機能を発揮していたのが商業都市大坂の強みだった。そして物資の集散市場というほかに、国内各地から集荷した米穀・農産物・家内工業製品などの価格を決定し、江戸やそのほかの地域に送り出すのが大坂だった。」（鈴木，2002，162-3頁。）

また大坂が取り扱っていたのは国内の産品だけではない。長崎を通じて海外、とりわけ中国や西欧からの物産や情報もたらされていたのであり、まさに国内外の産品のほぼすべてを網羅することのできる市場だった。たとえば現在も多くの製薬・薬品会社が軒を連ねる大阪船場の道修町では当時、長崎経由で中国やオランダから輸入（あるいは密輸）した薬種が大量に取引されていたのである。

問屋を中心として、当時の戦略的な人的資源である多くの商人の集積に成功したこと。そしてその結果大坂が得た、江戸にも勝る全国・海外の製品の集荷機能そして建値機能。これが江戸期の都市大坂が得た強みなのである。

## 6. 2 江戸期大坂のイノベーション2：差益商人

問屋が集積し、全国の物価動向を決定する建値市場となった大坂。新たなイノベーションが、大坂という建値市場機能を持つ都市に発生した。差益によるビジネスのしくみと市場での資本活用の確立である。それぞれについてみてゆこう。

### 差益商人の台頭

前述した問丸が問屋へと移行する過程、さらに問屋が細分化する過程で、大坂という都市におけるビジネスをさらに高度化させるひとつのイノベーションがおこった。差益を収益源とする商人たちの台頭である。そもそも問丸や、大坂に蔵を建てて大名の年貢米の回送・保管・売却を請けおう問屋は、当初その収益源を回送手数料、保管手数料、売却手数料などに頼っていた。しかしみずから蓄積した資本を手にした問屋の一部は、その資本で価格の安い時期に商品を仕入れて自分の蔵に保管し、値段が上昇したらそれを売却してその差益を確保するという差益商人へと移行していったのである。

### 市場での資本の活用

物資の集散地となっていた大坂にはさまざまな市場が建っていたため、そのような差益商人の活動にはうってつけであった。これは、たとえば北浜（のちに堂島）の米市場、天満の青物市場、上魚屋町（のちに鷺町）の雑喉場（魚市場）などで、あるいは材木・菜種などの品目ごとに建値がなされた。

差益確保の対象になったのは、財商品だけではない。全国との物流とりわけ金遣い圏である江戸との物流が盛んになると、大坂・西国を中心に使用される銀貨と江戸・東国を中心に流通する金貨を両替する為替市場も繁栄した。<sup>11</sup> 多くの市場、しかも建値市場として機能する市場が成立している大坂は、当時の大坂を舞台に増えつつあった差益商人たちにとって、絶好の活動の舞台を提供していた。

リスクはあるものの、このような差益による収入は手数料収入に勝る富をもたらした。たしかに差益の確保自体は、かならずしも大坂商人の専売特許であったわけではない。しかし全国規模の建値市場が大坂に生まれたことで、大坂で活動する差益商人は建値市場への容易なアクセスという地の利を利用することができた。その恩恵を得ることのできる大坂ではさらに商人の集積が進み、また多数の豪商が生まれていった。たとえば、

江戸時代初期に諸大名からの年貢米を一手に買い受けて米市場を握った豪商淀屋一族が、その代表例である。そして大きな富の蓄積を可能にする差益商人の集積は、大坂にさらなる繁栄をもたらした。その意味で差益重視のビジネスというイノベーションは、都市におけるビジネスの高度化という文脈において、非常に大きなインパクトをもっていたのである。

### 6. 3 江戸期大坂のイノベーション3：さまざまな投資・投機手法の確立

問屋の誕生、建値市場の発生、そして差益商人化、といくつかの商業上のエポックをみてきたが、さらなるイノベーションが大坂でおこっている。蓄積された富が、資本としてさまざまな分野に再投資されることになったのである。

まず市場におけるさまざまな投資（あるいは投機）システムの確立である。これはまず、（1）さまざまな製品の市場が立ち上がったこと、（2）米切手や為替手形など信用取引を促進する各種制度が整ったこと、（3）商人間の簡潔で高度な信用取引を可能にする商慣行の確立、によって可能になった。

（1）については前節で述べた。（2）については、大量の米や金貨・銀貨の運送や保管の手間を省くために生まれた米切手<sup>12</sup>や為替手形などの有価証券が流通するようになり、大きくレバレッジをかけた信用取引や先物取引なども可能になった。また投機的な取引もみられるようになる。たとえば、堂島の米市場では米価の上昇基調が続いていた元禄期まで、現米をあつかう正米（しょうまい）取引だけではなく、空米（からまい）取引<sup>13</sup>と呼ばれる投機的な取引が多く行われていた。空米取引は延（のべ）売買とも呼ばれ、対象品すなわち建物米（たてものまい）について期日を指定して取引するもので、現在の先物取引と全く同じ原理であった。直接米をあつかう米商人のみならず材木問屋、両替商、酒屋、商人を代理にたてた武家などがこのような取引に参入していたという（武光，2003）。材木市場などその他の市場でも、このような投機的な取引は行われていた。このような取引によって、大きな富を得る商人たちが生まれてきたのである。

また（3）については、こうした投資システムを発展させるには商人間の簡潔で高度な信用取引システムが不可欠だが、当時はそのような信用取引を支える商慣行が確立されていた（中川，2000）。たとえば、商取引の際に契約は口約束と手打ち（契約締結の印に双方が両手を打ち鳴らすこと）だけで完了したことなどがその例である。

資本の投下は、これらの相場だけにとどまらない。地方への投資である。大坂の大商人は、1704年にはじまった大和川の付け替えなどの後に、地元の豪農らとともに大規模な新田開発に投資したり、手工業原料となる菜種・綿・麻・藍・桑などの農産物の生産から加工までの川上方向への投資を行っていった。鈴木（2002）によれば、たとえば和

泉・河内では綿花の生産が盛んになっていたが、それを集荷・加工する問屋は大坂に集中し、綿作から撚糸・機織りまでが一貫して彼らの資本投下のもとに行われるようになっていたという。また、このような投資は畿内だけではなく各地へと広まっていった。彼らは地方の原材料産地に資本を貸し付けて必要な農産物を生産させ、それを納入させることで貸し付けの返済に充当させ、さらに後日の原材料生産に必要な資金を貸し付けたのである（ただしこれは大坂商人の専売特許というわけではない）。またこれも大坂商人に限ったことではないが、経済的困窮が進行しつつあった各藩の武家への融資も行われるようになっていた。つまり「大坂は、諸国からの生産物集積の場所ということを超えて、全国への資本供給機能を持つようになった」（鈴木，2002）のである。

#### 6. 4 小括

以上、大坂の発展とそれにつれて高度化していった都市ビジネスの発展を概観した。まず問屋という商業上のイノベーションが生まれ、資本の蓄積が進んでいった。そしてこれらの商人の集積は、各種の市場とりわけ建値市場としての大坂の強みを生み出した。建値市場への近接性という優位性は、さらに多くの商人の集積を可能にし、彼らの大坂での市場取引を増大させる。同時にこれらの多様な市場の発生と商人の富の蓄積は、続くイノベーションとしてそれまで手数料収入を収益源としていた問屋の差益商人化を加速させた。時を経て、これらの結果としての富の蓄積はあらたな投資へと向かう。すなわち投機を含む各市場での高度な信用・先物取引、そして地方への投資というイノベーションであり、特に地方への投資は大名への融資（大名貸し）とともに大坂の全国に対する資本供給センター・金融センターとしての地位をもたらすことになったのである。このように、江戸期の大坂ではイノベーションと商人の集積やその他商業都市としての比較優位の確立、富の蓄積がスパイラル状に起こり、都市ビジネスの高度化が進んでいった様子がよくわかる。かくして江戸時代中頃までには大坂は都市として、圧倒的な繁栄を誇るに至ったのである。

当時の大坂を形容する「天下の台所」という言葉は、明治以降多くの文献に用いられてきた（注2参照）。表1は野高（2007）が文献調査によって得た「天下の台所」の解釈の多様性を示したものだが、それは江戸期大坂の都市ビジネスの高度化の結果生じたさまざまな経済的側面を反映して、非常に多義的に用いられている。秀吉による大坂城築城当時、城・城下町および各種インフラの整備と付随する物流機能の発達から始まって、スパイラル的な都市ビジネスの高度化が生じ、大坂は当時の日本経済においてこれだけの機能を発揮する都市へと発展したのである。

## 7. 現代の都市戦略への示唆

江戸期の大坂は、商業都市として江戸・京都その他の大都市に対抗しつつ、その独自の優位性を確立し繁栄を極めた。しかし明治以降（実際には江戸後期以降）、大阪は江戸・東京に対して江戸時代のような商業都市としての優位性を失ってゆく。現在では、建値市場機能のほとんどは東京に移り、物流機能あるいは商業集積の面でも大きく東京の後塵を拝するに至っている。しかしレトロスペクティブな事例としての本稿で概観した江戸期大坂の来し方は、企業家とイノベーション、それらの集積としての都市ビジネスの発展に関して多くのことを示してくれる。われわれは、江戸期大坂の都市ビジネスの高度化のプロセスを考えることによって、以下のような現代の都市戦略への示唆を得ることができる。

### 7. 1 時代の流れを読んで戦略的資源の集積を促進すること

ケースにあるとおり、江戸時代に入り平和な時代になって日本全体が統一市場とする経済システムが構築されると、富の創造と経済発展に大きく寄与することになるのは、商人たちの活動であった。つまり当時の経済環境で経済発展に不可欠な戦略資源（人材）は、商人たちだったのである。時代によって経済発展に寄与する戦略資源は異なってくる。これを読みとって、成長の鍵となる戦略資源を集積できるかが重要なのである。たとえば開国以降の戦略的な事業は、外貨獲得のため輸出にあてられていた生糸や真珠その他のビジネスであったし、昭和の高度成長期では自動車や白物家電など各種民生事業であった。それらに必要な資源の集積が、都市や地域の経済的な発展を大きく左右していたのだ。その時代において富の源泉となる事業の戦略的資源の集積促進は、あらゆる時代を通じて都市ビジネスの創発と発展に必要な条件であると考えられるのである。

### 7. 2 ビジネスの機会・場をつくり出すこと

前項は、マクロ経済の大局的な流れを読むことが都市の経済発展にとって重要であるというものであった。一方でケースからは、あらたなビジネスが生まれる機会・場が与えられていることがまず必要条件としてあげられる。都市ビジネスは何らかのきっかけであらたなビジネスが生まれ、それが高度化をたどることで発展してゆく。そこには、発展プロセスの入り口となる機会・場が必要である。大坂は、陸上・海上交通の結節点としての優位性、大規模な天下普請のための物資の集積基地としての役割、政権所在地としての消費など、ビジネスが集積しやすい環境を持っていた。これらの要素があらたな都市ビジネスを生み出す可能性を高めることになったわけである。実際に本稿のケー

スでも、高度化プロセスの最初の一步は、物流環境の整った大坂での商人の集積という形ではじまっていくことになった。ビジネスの機会・場が存在することの意味であり、公的セクターが産業誘致の際にインフラ整備に力を入れる根拠ともなっている。ただし、これは必ずしも都市ビジネス高度化の十分条件ではないことに注意する必要がある。機会・場があってもそれを活用した連鎖的なビジネスの創発が続かなければ、都市ビジネスの高度化も都市の発展もあり得ないのである。

### 7. 3 イノベーターたちを引き寄せ内包すること

集積しつつある人材のなかには、複数のイノベーターたちが存在した。たとえば最初の間屋、米会所の最初期の元締め、あるいは差益の確保に着目した商人たちである。都市ビジネスの高度化は、これらのイノベーターが引き起こすイノベーションが都市内に浸透することによって進んでいったのである。都市ビジネス戦略の観点からいえば、これらのイノベーターたちが大阪でイノベーションを起こすこと、あるいは彼らが大阪にやってきてイノバティブな活動することが重要である。そしてひとたび彼らがイノベーションを起こせば、彼らの活動を他所に流出させることなく都市内に定着させる必要がある。更にそのイノベーション自体を都市に定着させ拡大し発展させることで、都市ビジネスの高度化プロセスを促進し、それによってその都市の比較優位を構築する必要がある。

これらの点を深く考察することで、連鎖的にイノベーションが誘発され都市ビジネスが高度化するスパイラル・プロセスの解明につながるであろう。ただし本稿では紙幅の関係から、その詳細な検討を十分におこなうことができない。その詳細な検討は、別の機会を待つことにしたい。

### 7. 4 国や国際的な経済の枠組み・経済政策の中で戦略的な発展を考えること

大坂は民間活力によって発展してきた都市である。大阪夏の陣後の復興で道頓堀・江戸堀・京町堀などを開削し周囲を町地として発展させたのは、幕府ではなく大坂の豪商たちの投資であったし、のちの大和川の付け替えとそれに続く流域の開発も豪農や豪商たちの投資として行われている。このような民間活力・民間投資は都市大坂の発展に大きく寄与してきた。しかしそれでも忘れてはならないのは、当時の為政者たちとの協調体制である。

大坂は豊臣政権の政権所在地として発展した。また大阪夏の陣後の荒廃を経て江戸時代には幕府の直轄地となり西国の軍事支配と日本の統一市場における経済活動の拠点としての地位を与えられ、経営されてきた。つまり豊臣政権および江戸幕府の全国統治の

枠組みの中に、完全に組み入れられていた。豊臣政権から江戸幕府への政権移動という激動期も乗り越えて、統治者たちと良好な関係を築いてこられたことが大坂の発展にも大きく影響しているといえる。このような政権への協調体制のもとにあったがゆえに、天下普請が行われて有効需要が創出され、大名屋敷や蔵屋敷が建設され、海上交通網の中に組み込まれ、地子銀免除などの特権にあずかることもできたのである。

しかしそれ以上に都市としての大坂にとって重要だったのは、実際に当時の大坂が単に保護を受けただけではなく、それを都市ビジネスの高度化に結びつけ日本の経済のなかで重要な役割を果たしうる実力を身につけることができた点である。江戸幕府が経済戦略に関しては後手後手にまわった観のあるなかで（たとえば鈴木（2002）参照）、逆に言えば大坂には経済発展に関しては一定の枠内で非常に高い自律性とビジネスチャンスが与えられていたことになる。そのような条件のもと、ケースに見られたように多くの商人の集積が進むに従って、革新的な商人たちによるイノベーションが起こった。その結果畿内という枠を越え、日本の統一市場のなかで中核的な役割を果たすことのできる都市へと発展することができたのである。

この点に関する現代へのインプリケーションは、都市・地域という広さではなく、国あるいは国際的な経済の枠組み・経済政策の中で戦略的な発展を考えることの必要性である。現在の大坂の地盤沈下を止めさらなる発展を考える際には、江戸期大坂が「天下の台所」としての役割を果たしていたように、現在の大坂が関西という枠だけではなく日本、アジア、あるいは世界においてどのような役割を果たし貢献するのかを考える必要がある。つまり中央との協調といっても、単なる中央からの保護への依存ではなく自立した都市としての協調戦略が求められているのである。

またそのような戦略的な方向性ができたとしても、実際にそれを実行するのはケースにあった革新的な商人たちのようなマイクロレベルの企業家や企業である。内発的要因としての民間活力、外生的な国家レベル・国際レベルの経済枠組みや経済政策との適合性。この二点がうまくかみ合っていることが重要である。以上のポイントを押さえたうえで、中央政権、国内外経済の主要プレイヤーなどとの良好な関係を構築することの重要性を最後に強調しておきたい。

## 8. 結論

以上、桃山・江戸期の大坂の商業の発展を、都市ビジネスの高度化という観点から分析してきた。すでに述べたように大坂が「天下の台所」として発展した背景については、

多くの文献がその要因について直接的・間接的に言及している。本稿はそれらの貢献を否定するものではなく、むしろそれらの説明に補われつつも「なぜ新興都市大坂において高度の経済発展が実現し、当時の日本の経済の中心となり得たのか」について、都市内部からのイノベーションの連鎖という新たな視点を示そうという意図のもとに、分析が進められた。

本稿では紙幅の関係から大坂商人でも江戸初期の間屋を中心として、内部から都市ビジネスの高度化にかかわる大きなイノベーションを起こした豪商たちを念頭において記述してきた。しかし当時の商業上のイノベーションは、これ以外にも数多く存在した。とくに江戸期中期以降、購買力を蓄えた大衆を顧客にする小売業などでも数多くのイノベーションがおこり、それが大坂そして日本の経済発展に大きく貢献してきたことは書き添えておきたい。理論的・実践的により深いインプリケーションを得るために、今後はこのような要因も視野に入れ、より詳細な分析をすすめていく必要がある。

また本稿は大坂の都市ビジネスを高度化させた内的要因に焦点を絞ってきた。しかしさらに大坂という都市の発展の外的要因に目を転ずるならば、豊臣秀吉による大坂城築城以前の大坂本願寺寺内町時代、大坂は畿内の寺内町ネットワークの中心にあり（仁木、1995）、また豊臣政権期以降の大坂の開発に際しては堺や平野、伏見の住人が大坂に移住もしている。その意味で都市としての大坂の発展には、その周辺の地域・都市に存在する社会的に埋め込まれたネットワークが大坂の発展のスタートアップ段階で何らかの役割を果たしている可能性も考えられ、今後の展開が期待される。

本稿の考察には、まだ荒削りな部分があることは筆者自身の痛感しているところである。今後もより精緻な分析をすすめていく必要があることを強調して、筆を置きたい。

---

<sup>1</sup> 当時は大阪を「大坂」と記した。本稿も多くの歴史書の記述方法にならって、以下では江戸期の大阪を示す場合「大坂」と表記する。

<sup>2</sup> 「天下の台所」と形容される江戸期の大坂だが、その示す内容には多義性がある。野高(2007)はこの言葉がいつからどのように使われてきたかを調査している。野高(2007)によると江戸時代以前には「天下の台所」という語の使用は見つかっておらず、この呼称の初出は明治40年代以降のこととされる（江戸時代には「日本の台所」「諸国の台所」という表現は見られた。）。

<sup>3</sup> 室町幕府、守護大名やその他の荘園領主、国人衆（和泉・摂津の国人一揆の中心グループ）、本願寺門徒（畿内一向一揆の中心グループ）、山岳地帯に勢力をふるった一山寺

院（河内国観心寺など）、河内久宝寺や摂津富田林の寺内町、淀川や三国川（神崎川）沿いの港湾都市（別所（大阪市）、地下（神戸市）、尼崎、杭瀬（尼崎市）、堺や平野などの自治都市など。これら畿内における経済活動と都市・集落のネットワークに関しては、天野（2004；2007）、仁木（1995；2003）などが論じている。

<sup>4</sup> 徳川幕府による大坂城の再建は、三期十年にわたって近畿・西国の六十四大名が動員され、支出は銀10万貫以上、米換算で434万石と推計される。（脇田，1994）

<sup>5</sup> 当時は航海技術の水準が低かったため、帆船で東北地方から海路房総半島をまわり込んで江戸入りすることが非常に難しかった。そのため、銚子から河川と運河沿いに江戸入りする経路が構築されたのである。1671年には河村瑞賢によって、房総半島を回り込まず、下田で風待ちをして江戸に入る東回り航路が開拓される。この航路は下田での風待ちが必要だったため日数がかかることもあったが、潮流と風に乗ることのできる容易な航路でしかも大量の荷を積んで海から江戸に入ることができた。

<sup>6</sup> 蔵米の受取と売却を旗本・御家人から請けおう商人で、金融もおこなった。

<sup>7</sup> 田畑面積は江戸時代初めの164万町歩から18世紀初めには297万町歩にまで激増していた（石井他，1997）。

<sup>8</sup> たとえば江戸で「金一両につき米〇〇石〇〇斗」、上方では「米一石につき銀〇〇匁〇〇分」という値の建て方をしたのは金が定額貨幣、銀が秤量貨幣だったためであるという。

<sup>9</sup> 京都は当時日本第二位の大都市で、天皇家・宮家・公家・寺社など多くの後背人口を抱えていたため、関連する手工業が発達した。また江戸でも武家間、武家・町人間あるいは幕府・大名間の進物や歓待などの需要で、関連する手工業やサービス産業が大きく発展した。

<sup>10</sup> この結果、以後関東の地回り経済に大きな発展をもたらした（鈴木，2002）。

<sup>11</sup> 金銀相場の為替取引による差益も、通常の商品の差益と内容的には変わらない。両替商は、その意味で差益の確保を目的とする他の問屋とその性質を同じくしていたわけである。

<sup>12</sup> 大名の蔵屋敷の米は、仲買の入札によって捌かれた。入札のたびに米の受け渡しを行うのは手間がかかったため、蔵屋敷は一石に一枚の米切手を発行し、後日現米が必要になった時点で仲買は米切手を蔵屋敷に持参し米と交換した。この米切手はのちに有価証券として用いられたため、米切手を売買する市場が生まれ投機の対象にもなった。

<sup>13</sup> 大名の蔵屋敷に実際に現米を保有しないまま先手形を売却して資金を調達し、後日到着する廻米で補填する取引。これは、蔵屋敷から米を落札した米仲買が一度に米を受け取ることは稀で、蔵出し期限が到来するまでは現米準備のないまま有価証券化した先手形（すなわち米切手）の転売を重ねることができたためである（鈴木，2002）。